

## VI 他誌発表

**千葉県における赤痢・腸チフス・パラチフスの発生状況** 三瓶憲一：千臨技会誌，32，1，2～6，1984

千葉県における最近（1970～1982年）の分離株からみた赤痢，腸チフス，パラチフスの発生状況を検討した。赤痢では国内に起因する事例が減少する一方，海外で罹患したと推定される事例の占める割合が増加した。菌型ではA群，C群も分離された。赤痢集団発生の原因施設は社会福祉施設に多く，起因菌の多くはCPを含めた多剤耐性菌であった。腸チフス，パラチフスとも患者は若年層に多く，保菌者は40才以上の女性に多くみられた。

**忘れられていた赤痢** 千葉県感染症サーベイランス解析評価小委員会（市村 博，太田原美作雄）：千葉県医師会雑誌，37-2，87～90，1984

最近の赤痢は，かつて，多くの重症患者が発生した時代と，発生状況が異なり，流行菌型がB，D群であることもあってか，きわめて軽症化した赤痢となってきた。この様な状況の中で，1977年市川市，1982年袖ヶ浦町で福祉施設から集団赤痢が発生してきた。また1984年12月には千葉市内で一家族を中心とした赤痢が発生したがいずれも，赤痢，あるいは赤痢と疑うまでに，20日～1ヶ月近くも経過しており，その間に多くの二次患者が出てしまい，防疫上きわめて遺憾な状態にある。開業医，校医，健康管理医等を含めた防疫担当者に，下痢を主訴とする患者の取扱いは充分注意して診断，対応するよう千葉県感染症サーベイランス解析評価小委員会として呼びかけた。

**千葉県における百日咳患者の発生状況** アンケートによる実態調査 その2-，木村泰人<sup>1)</sup>，橋爪 壮<sup>2)</sup>，太田原美作雄<sup>3)</sup>，市村 博<sup>3)</sup>，遠藤 明<sup>3)</sup>，徳永 勁<sup>3)</sup>：千葉県医師会雑誌，36-6，13～16，1984

千葉県感染症情報解析小委員会では，1982年から3ヶ年の計画で，百日咳患者の発生状況をアンケートにより調査を行なっている。今回は2年次の報告である。前回とはほぼ同様の成績であり，県北部から，東京都に隣接した地域での集中した患者発生の報告があった。これは感染症サーベイランスに報告されてくる患者発生地域とその傾向はほとんど同じであった。月別の患者発生をみると，1982年の発生より若干ずれて，夏から秋に発生のピークがみられ，さらに冬季にも患者発生があった。患

者の予防接種歴は，受けていない者が93%（186/200）と高かった。患者年齢は3才児までで67.5%（135/200）占めており，この年齢群への予防接種が妥当であることが認められる。

- 1) 千葉県医師会
- 2) 千葉大学看護学部
- 3) 千葉県衛生研究所
- 4) 千葉県衛生部保健予防課

**ボツリヌス菌による食中毒死亡例** 千葉県での症例-，市村 博，七山悠三：病原微生物検出情報，57，6～7，1984

九州，熊本市S社製真空パック入からしれんこんに起因するボツリヌス菌食中毒事件（1984，6，14～6，28，患者31名，死者9名）での千葉県内発生は1件，患者1名であったが，不幸にも患者は死亡した。

患者は旅行中からしれんこんを食し，さらに，自分が土産として購入した真空パック入りからしれんこんを帰宅後家人と共に食して，都合2種類のからしれんこんを口にしていた，家人は発病していない。

感染時期の推定は困難である。発病時期は，6月25日朝と推測されるが，患者は以前から高血圧症で，また白内障の病歴をもっていたことから，目の異常に気がつくのが遅れたと思われる。

### 千葉県におけるつづが虫病患者の発生状況

太田原美作雄<sup>1)</sup>，時枝正吉<sup>1)</sup>，山辺靖子<sup>1)</sup>，海保郁男<sup>1)</sup>，酒井利郎<sup>1)</sup>，春日邦子<sup>1)</sup>，市村 博<sup>1)</sup>，七山悠三<sup>1)</sup>，須藤恒久<sup>2)</sup>：臨床とウイルス，12，299～301，1984

房総半島南端には，昭和27年二十日熱と呼ばれる非アカ媒介性つづが虫病のあることが北研，医科研，衛研，地元保健所等の調査で確認されていた。その後暫く発生の届出はなかったが，昭和57年10月～58年3月の間に22名，58年4月～59年3月93名と年と共に患者の増大をみるに至った。患者の発生状況は前回の発生と同様冬期に多く，媒介昆虫のタテツツガムシ，フトゲツツガムシの出現時期とよく一致している。

- 1) 千葉県衛生研究所
- 2) 秋田大学医学部

**国産落花生の糸状菌分布とカビ毒** 高橋治男<sup>1)</sup>，矢崎廣久<sup>1)</sup>，一戸正勝<sup>2)</sup>：防菌防黴誌，12，429～436，1984

1971～1972年産千葉県農家保有落花生69点，および1977～1981年にかけて県内卸売・加工業者より採取した国内産落花生135点の計204検体について，アフラトキシン産生*Aspergillus flavus*を主とする糸状菌分布ならびにアフラトキシンの検索を行なった。

その結果、分離されたアフラトキシン産生株は24検体より35株と比較的少数であり、またアフラトキシンも規制値の10ppbを越えた検体はみとめられず、痕跡量のアフラトキシンを有する試料が6検体検出されたのみであった。これらの結果は、国内産落花生がアフラトキシンにより汚染されている可能性がきわめて低いことを示唆した。

1) 千葉県衛生研究所 2) 国立衛生試験所

**有機りん剤抵抗性イエバエのピレスロイド剤淘汰によるピレスロイド感受性の変化。** 林 晃史<sup>1)</sup>, 新庄五郎<sup>2)</sup>, 衛生動物, 36, 59-63, 1985

有機りん剤抵抗性イエバエをレスメトリン、ペルメトリンおよびフタルスリンで、20世代から30世代にわたって淘汰し、これらのピレスロイドに対する感受性の変化について検討した。

実験の結果、いずれのピレスロイドに対しても抵抗性の発達は認められず、本邦産イエバエは短期間にピレスロイド抵抗性の発達はないものと考えられた。

1) 千葉県衛生研究所 2) 住友化学工業(株)農業研究所

**Liperoxide levels in tissues of the rat administered CdCl<sub>2</sub> under various ambient temperatures.** J. Sajiki and E. Fukushima : Jpn. J. Zootech. Sci., 55, 107-112, 1984

カドミウムのひきおこすラット精巣障害に環境温度がいかなる影響を及ぼすか調べるため、種々の環境温度に順応させたラットの臓器中過酸化脂質を測定した。

環境温度が高まると、CdCl<sub>2</sub>の投与いかんにかかわらず、すべての臓器(肝臓、腎臓、精巣)の中の過酸化脂質値が増加した。

これら結果から、カドミウム中毒精巣で観察される温度依存性の炎症増強作用は、環境温度の上昇により増加した過酸化脂質が一因と考えられた。

**カドミウム投与ラットにおけるアルカリホスファターゼ活性の変動。** 佐二木順子, 福島悦子, 衛生化学, 30, 309-312, 1984

CdCl<sub>2</sub>をラットに投与すると血清中のアルカリホスファターゼ(AI-p)活性が有意なレベルに低下する。この理由を明らかにするため、臓器中AI-P活性について調べた。

血清中AI-P値の低下に反し、肝臓ならびに精巣中のAI-P値は有意なレベルに上昇していた。一方、in vitroの実験より、Cdは、AI-Pの活性を抑えることが明

らかであり、血清中AI-P値の低下は、血清中にCdが大量に存在することにより生ずるCd直接の障害であることが知られた。

**カドミウムによる精巣障害関連因子の経時変化について。** 佐二木順子, 福田芳生, 衛生化学, 30, 177-182, 1984

カドミウムによるラット精巣障害の発症メカニズムを究明する目的で、CdCl<sub>2</sub>(5.0mg/kg)をラットに投与した後300日にわたる種々の因子の経時変化を調べた。CdCl<sub>2</sub>投与後3日目の精巣では精細管の萎縮が著しく、300日を経過すると、精細管はCa, Pを主体とする物質で埋めつくされた。X線分析によるCaピークの増加は、CdCl<sub>2</sub>投与後3日目に認められ、CdCl<sub>2</sub>による精巣障害にCaが深く関与しているというこれまでの著者らの結果を裏付けた。

**通気分離後に比色法を用いる食品中の微量亜硫酸の定量。** 宮本文夫, 佐伯政信 : 日食工誌, 31, 739-745, 1984

改良ラロキン比色法について吸収液と測定条件を検討・改良した。吸収液はトリエタノールアミンを用い、アルデヒド及びアルコールは吸収液と冷却管の間に2・4-ジニトロフェニルヒドラジン含有40%リン酸を入れ除去した。通気条件は反応温度70°C, N<sub>2</sub> 800ml/分通気, 酸量20%リン酸40mlで行った。本法での亜硫酸添加食品の測定値は改良ランキン比色法より高く、亜硫酸無添加食品(他のイオウ化合物を含む)の盲検値は低かった。

**通気分離後にガスクロマトグラフィーを用いる食品中の微量亜硫酸の定量。** 宮本文夫, 佐伯政信 : 日食工誌, 31, 685-690, 1984

GP法を基に通気分離後にGCで亜硫酸を定量する方法を開発した。本法に対するアルデヒド及び亜硫酸以外の揮発性イオウ化合物の妨害は原法より少なかった。通気一比色法と本法での亜硫酸測定値はわさびを除く他の食品では良く一致した。通気一比色法及び改良ランキン法で亜硫酸無添加食品(他の揮発性イオウ化合物を含む)から検出される亜硫酸盲検値は本法により亜硫酸そのものの値であることが確認された。

**Sensitive Determination of Ethopabate in Chicken Tissues by Liquid Chromatography with Fluorometric Detection.** Tomoko Nagata<sup>1)</sup>, Masanobu Saeki<sup>1)</sup>, Hiroyuki Nakazawa<sup>2)</sup>,

Masahiko Fujita<sup>2)</sup>, and Eigo Takabatake<sup>3)</sup> :  
 J. ASSOC. OFF. ANAL. CHEM. 68, 27-28, 1985  
 鶏肉からエトパベートをアセトニトリルで抽出し、濃縮後、酢酸エチルに転溶し、次いでフロリジルカラムでクリーンアップを行った。ゾルバックスODSカラムを用い、移動相は、アセトニトリル：0.01MKH<sub>2</sub>PO<sub>4</sub>：トリエタノールアミン（40：59：1）をリン酸でPH4.0としたものを用い、励起波長306nm、蛍光波長350nmで検出した。0.01ppm及び0.05ppmのエトパベートを添加しそれぞれ87.8、92.7%の回収率を得た。検出限界値は100pgであった。

- 1) 千葉県衛生研究所 2) 国立公衆衛生院  
 3) 摂南大学

高速液体クロマトグラフィーによる鶏肉中チアンフェニコールノ定量法。 永田知子<sup>1)</sup>、佐伯政信<sup>1)</sup>、中沖裕之<sup>2)</sup>、藤田昌彦<sup>2)</sup>、高島英伍<sup>3)</sup>、食品衛生学雑誌、26、46-49、1985

鶏肉からチアンフェニコールをアセトニトリルで抽出し、n-ヘキサンで洗浄した後、アセトニトリル層を乾固した。残渣をセップパックフロリジルカラムを用いてクリーンアップし高速液体クロマトグラフィーに供した。ゾルバックスODSカラムを用い、移動相をメタノール：水（1：9）とし230nmで検出した。添加回収率は、0.05、1.0、5.0ppm添加でそれぞれ70.6、86.4、94.1%であった。検出限界値は5ngであった。

- 1) 千葉県衛生研究所 2) 国立公衆衛生院  
 3) 摂南大学

## VII 学会発表

九州地区産イエバエの殺虫剤感受性について(2). 林 晃史<sup>1)</sup>、新庄五朗<sup>2)</sup>、牧田光康<sup>2)</sup>、日本衛生動物学会、広島市、1984. 4. 2~4

九州、宮崎県下の数ヶ所からイエバエを採集し、ピレスロイドに対する感受性について調査した。

レスメトリンに対し、前年よりも感受性の低下傾向はあるが、問題になるレベルの低下ではなかった。なお、感受性の低下した地区では、協力剤を配合すれば容易に防除する事が出来た。

- 1) 千葉県衛生研究所 2) 住友化学工業(株)農業研究所

室内じん中ダニ類の防除について。 林 晃史：日本衛生動物学会殺虫剤研究班大会、東京都、1984. 5. 23

集合住宅で多発生し、問題になっている室内じん中ダニ類ノ殺虫剤にする駆除を実地で検討し、その結果について報告した。

実験には、ペルメトリレとプロボクスルを用いたが、いずれも効果的で、特に、プロボクスルは残効性に富んでいた。

一般家庭で、各自が駆除する場合は、ペルメトリン燻煙剤で室内全体の殺虫処理を実施すると共に、プロボクスル油剤を新聞紙に処理し、畳の下に設置することにより、長期間にわたって効果のあることを明かにした。

脂質代謝からみたカドミウム投与ラットの精巣における炎症発生メカニズム。 佐二木順子<sup>1)</sup>、平井愛山<sup>2)</sup>、田村 泰<sup>2)</sup>、吉田 尚<sup>2)</sup>：第5回日本炎症学会、東京都、1984、7.13~14

CdCl<sub>2</sub>中毒ラットの精巣炎症には、脂質過酸化が深く関与しているものと考えられている。そこで、脂質過酸化のメカニズムを解明するため、リン脂質ならびに遊離脂肪酸含量の経時変化、脂肪酸構成等について調べた。

その結果、CdCl<sub>2</sub>投与後6時間目に精巣においてアラキドン酸の遊離が著しく亢進していることが明らかであった。

このことから、リン脂質からのアラキドン酸遊離が過酸化脂質生成のイニシエーターになっている可能性を示唆するものと考えられた。

- 1) 千葉県衛生研究所 2) 千葉大学医学部